

コロナ禍で多くの人が、動かない、考えない、発言しない、つまり「自粛」があって、自由はない。状況が生まれることを、私は危惧しました。市民が社会に自信を失い、社会を見失っているのではないか、ということですね。そういう思いから、日本ペンクラブ会長名で「緊急事態だからこそ、自由を」という声明を発表しました。

もう一度社会を

取り戻そう

緊急事態のもとで、移動の自由はもとより、教育機関・図書館・書店などが閉鎖され、公的施設も使用制限されました。これによって、学問の自由、知る権利、集会、言論・表現の自由も制約された。とっさに思い浮かぶのは戦前・戦中の日本ですね。戦後の私たちは先人の苦い歴史に学び、どんな危機にあっても自由な言論や表現こそ社会を健全にしてきたことを知っています。

コロナ禍で政府がおこなった対応はお粗末でした。「アベノマスク」にはのけぞりましたし、突然の一律

休校にも科学的根拠は示されず、現場の議論もなかった。日本中の学校がリモート授業の準備もないまま、これに従ったことに驚きました。

コロナ禍を克服するには、みんなが事実を知り、議論することが必要であり、そのためには自由な言論、知る権利が不可欠です。だから「みんなでもっと具体的に議論し、もう一度、社会を取り戻そう」、そう訴えたかったのです。

新自由主義を

超えて

冷戦後のグローバルな市場経済のもとで、際限のない利潤追求をすすめてきた新自由主義は個人々人をバラバラにする価値観を広めてきました。それによって相互に依存し、助け合う社会観がなくなって、格差、貧困、弱者は自己責任にされ、公的な医療・福祉体制も切り捨てられてきました。行政は公的役割を担わなくなり、下請け民営化がすすめられてきた。そのひずみが、コロナ禍で一気に顕呈したのではないのでしょうか。

その結果、私は「壮大な停滞」が日本社会で起きていた、と思います。この四半世紀、日本の生産性はG7で最低、OECD（経済協力開発機構）加盟国36カ国中で21位（2018年）に甘んじる国になりました。戦後日本が得意としてきたモノづくりの意欲は減衰し、情報産業は米韓の後追いはかりです。集団的一斉授業を脱皮できない学校では、子どもたちの学力も落ちている。しかも、マスクも防護服も医療機器も、国内では生産しない国になっていったことを、今回のコロナ禍は明らかにしてしまいました。

市民が自信を

持つこと

モリカケ、桜問題などが続き、よほどの支持者でないかぎり、うすうす安倍政権はおかしいとみんな思っていました。でも、それは、自分に直接、被害をもたらすものでなかった。そこにコロナ禍が直撃したんです。コロナ禍で日本社会の底の浅さ、厚みのない社会が見えたと思います。これが新自由主義がつくり

だした日本の姿です。いまコロナ禍を乗り越え、新しい社会をつくりだすためには、市民が自信を持つことが大事だと思います。

この間、社会が絶対必要とするエッセンシャルワーク（不可欠な仕事）が注目されましたが、私たちは医療・福祉・介護や医療機器産業だけでなく、食料を生産する第一次産業、交通・輸送、教育などがどうあるべきか、あってほしいかを議論し、実際に充実させていかなければならない。文学、アニメ、映画、演劇、音楽など文化活動も未来の社会像をつくる仕事なんです。

新自由主義の政府は、もうみなさんの面倒はみせんよ、という政府です。だったら、私たち自身が自分の手で社会を運営して、もう政府の面倒なんかみせんから、と言えるような自信を持てばいいんです。そうやって突き放さないかぎり、政府なんて変えられませんか。コロナ禍を乗り越えたとき、私たちが自信を持って新自由主義を抜けていっていることを、私は期待しています。

（聞き手 乾 友行）

人からいそ、自由を